

研究所だより

第451号
2022年12月22日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ もう いくつねると お正月 お正月には 凧あげて
こまをまわして 遊びましょう はやくこいこい お正月 ”



『お正月』 1901年(明治34年) 唱歌 滝 廉太郎

～ 冬来たりなば、春遠からじ ～

今年も残すところ、あとわずかとなってしまいました。暦の上では、22日は冬至で一番昼が短く、夜が長くなる。冬の間点にあたりますが、寒さはこれからが厳格り、本格的な冬の到来となります。厚生労働省は「年末になり全国の感染者数は爆発増えず、微増・微減を繰り返しています。大都市では緩やかな増加が続いています。にもやはり増加傾向が続いていくとみられます。また、新たな変異ウイルスの拡大も懸念されています」と予測しています。冷え込みが厳しくなるとインフルエンザの流行も懸念されますので、引き続き基本的な感染防止対策(マスク、手洗い、うがい、3密回避、体調の管理)の徹底に留意しながら年末年始をお過ごしください。



(1年
しくな
的には
全国的

真正の構成的グループエンカウンターによる学級づくり⑩ (指導と評価 2023.1) 〔 集団づくり後期のポイント 〕

和久田 耕平教諭 (交野市立星田小学校)
米田 薫教授 (大阪成蹊大学)

1 三学期は一年のまとめと来年度への橋渡しを

新しい年の始まりは、区切りを意識するきっかけとなる。昨年の楽しかったことや嬉しかったこと、成功したことなどを踏まえて昨年の積み重ねの上でよりよいスタートを切ることもできるかもしれない。または失敗したこと、うまくいかなかったこと、やりたかったけどできなかったことなどを踏まえて、残りの期間に取り組みたいことを意識してリスタートすることもできるかもしれない。三学期は、個人や集団が今までに積み重ねてきたものを発揮したり、改めて気づいた課題に取り組んだりしながら一年間のまとめと来年度への橋渡しができることよい。

2 三学期おすすめのエクササイズ「人生ライン」

互いの信頼関係が醸成され、何でも話し合える関係が築かれている時期にぜひ取り組みたいエクササイズの一つが、ジュネリックエンカウターの定番「人生ライン」である。クラスで行う場合は、今年一年に絞って行う「この一年の人生ライン」がある。目的は、自他受容である。一年間を振り返り、「あの時、嬉しかったなあ。この時、辛かったなあ」という気づきから、良いことも悪いことも含めてこれが私が過ごした一年間なんだと感じてもらい、来年はどのように過ごしたいか考えるきっかけにしたい。また、同じクラスの友だちの人生を聞いて、「ああ、同じ経験をして感じ方や捉え方は人それぞれなんだなあ」と実感してもらいたい。

- (1) 目的を共有する：教室での一年を振り返り、自分を見つめ直し、次の一年へ繋げる。(自他受容)
- (2) インストラクション：「今日はみんなでこのクラスでの生活を振り返り、人生ラインに表してみましょう。目的は、互いに山あり谷ありだった一年間であった出来事を振り返ることです。自分のことをしっかり見つめ直す機会だと思って取り組みましょう」
- (3) エクササイズ：ワークシートに折れ線グラフで一年間の気持ちのアップダウンを+10~-10で書き込む。その際、教員がデモンストレーションで自分の人生ラインを紹介する。教員が見せるシートには、来年の予測も書き込んでおく。書き始めは、始業式からでなくとも、書きやすいところから

始めて後でつなぎ合わせればよいことを伝える。シートに書き込めたら、4人組で1人ずつ人生ラインの説明をする。聞いていて、質問があればしてもかまわない。実施時間は子どもたちの実態に合わせて調整する。

(4) 留意点：どうしても今日は書きたくない、話したくないという時期があったらそこはカットしてもよいことを伝える。時間があれば、来年度の予測を考える。

なお、この一年で身近な人を亡くすなど大きな傷つき体験のある児童生徒がいる場合は、事前にエクササイズの内容を伝えて参加の仕方を相談しておく。

(5) シェアリング：互いに語り合ってみて、今どんな気持ちかを4人で話し合う。数組にインタビューして、全体でもシェアリングを行う。

(6) フィードバック：「『人生ライン』をして自分のことを振り返ったり、人の人生ラインについて聞くと人生には山もあれば谷もあるなあと感じた人もいたんじゃないでしょうか。山や谷は自分のことだけでなく、誰かとの関わりの中で生じていて、温かい支えや励ましの中では、谷は低く、山は高くなだらかなるでしょう。この一年を振り返って感じたことを来年の一年に活かしてほしいと思います。」

3 エンカウンターを軸にした学級づくりのよさ

年間を通して構成的グループエンカウンターに取り組み、普段の授業や行事の中でも目的を意識してシェアリングを行っている、クラスのメンバーの自己理解は少しずつ深まり、自他受容が促進され、互いを尊重した自己主張・自己表現が増えてくる。もちろん、だからと言ってトラブルがゼロになることはない。子どもたちは日々の生活の中で様々な要因やきっかけから学習にうまく取り組みなかつたり、互いにちょっとしたことでぶつかり合ったりもする。しかし、これまでの取り組みがあるからトラブルが起こった時も、お互いの気持ちや願いを聞き合い(ワンネス)、どうしたらいいかを考え合っ(ウイネス)、これからどうするかを伝え合うことができる(アイネス)。エンカウンターを軸にして学級経営を行うと集団はもちろん、個への対応力も向上すると思う。

4 充分でないところがあれば、もう一度

エクササイズの中には、集団づくりが進んでくると、使えなくなるものもある。例えばサイコロトークは、ある程度自由に誰とでも話せる集団になった子どもたちには枠組みが窮屈に感じられることが多い。

そこで、三学期に限ったことではないが、集団づくりの段階に応じて、ワンネス、ウイネス、アイネスを意識してエクササイズを選び実践してみるとよい。新しいエクササイズに挑戦してもよいし、今までに行っていたエクササイズの中からもう一度行うのもよい。一年のまとめの時期だからこそ、焦ることなく今一度、うまくいっている・できているところ、もう少し積み重ねる必要のあるところを丁寧に見つめ直して実践を重ね、子どもたちにとってよりよいクラスをめざしたい。(和久田耕平)

5 三学期は自分を打ち出せるクラスをめざそう

クラスづくりは一年間を見通して進めることが肝要であると以前に述べた。エンカウターの立場から言えば、一学期当初の自己理解に重点を置いたエクササイズから始め、続いて互いを受け止める自他受容に移行する。二学期にはエクササイズ体験だけではなく、学校行事等で協働することを通じて役割を遂行して新しい自分と出会ったり、仲間との交流の中で感受性を促進したり、互いの信頼感を深めていくのが定石である。

そして三学期の目標は、内省して培った自分の思いや気持ちをクラスメートを信じて堂々と語るクラスをめざしたい。それには、子どもたちの中で「このクラスなら何でも話せるし、どんな話でも受け止めて聞ける」というコンセンサスが必要である。そういう風土を醸成するには、教員の日頃のシェアリングの力量がものを言う。

6 シェアリングの展開の熟達化を進めよう

私はシェアリングの際、メンバーが発言したらその都度、リーダーの務めとして1人ひとりにフィードバックしなければと思ってコメントしていた時期がある。「何だかシェアリングが深まらないなあ」と思っていたら、何のことはない、自分がシェアリングの流れをブツ切りにして阻害していたのである。

子どもの伸びる力を妨げないだけでもよい教育になるといわれるが、それはエンカウンターでも同じである。シェアリングは、年度当初はリーダーである教員と発言した子ども1人ひとりとの一対一対応になるが、集団の成長と共に子どもたちに任せていくと、子ども同士のシェアリングがかみ合い、全体

として深まっていくことが実感できるだろう。成長した子ども集団の力を信じ、それほど教員が舵を取らなくてもシェアリングできる集団に成長するのを見るのは快感である。もちろん、これはクラスを指導するリーダーシップ全般に言えることである。(米田 薫)

～第5回教研推進委員会～

12月8日(木)に第5回教研推進委員会を開催しました。半日教研の総括と来年度の教研活動について協議しましたので、その協議内容について報告します。

1 協議事項

(1) 半日教研 [11/9(水)] の総括

- ① 日程について
 - ・この日程でよい
- ② 時間構成について
 - ・この時間設定でよい
 - ・開始時間の周知を徹底する
- ③ その他
 - ・学校行事等が急遽変更し半日教研の日程と重なった場合は、児童生徒の日程優先で柔軟に対応していく

(2) 2023年度 組織・一日・半日教研について

① 組織教研

- ・期 日： 4月19日(水)
- ・会 場：清水中学校
- ・内 容：開会行事、部会研修

② 一日教研

- ・期 日： 8月2日(水) 午前：全体会 午後：部会研修
- ・会 場：土佐清水市立中央公民館、清水小、清水中
- ・講 演：講師 塩田 真吾准教授(静岡大学教育学部)
演題 「(仮)情報教育モラルについて」(講話・演習)



③ 半日教研

- ・期 日：11月1日(水)
- ・会 場：各部会各会場

(3) 市教研・研究協力校提出物について

○教研各部会	提出締切	○研究協力校	提出締切
* 決算書	12月28日(水)	* 研究集録原稿	1月31日(火)
* 総括教研部会報告書	1月27日(金)	* 決算書	2月15日(水)
* 研究集録原稿	1月31日(火)		

(4) 第6回教研推進委員会

- ・期 日：2023年 2月14日(火) 16:00～
- ・会 場：教育センター

第3回教育支援コーディネーター連絡協議会(あすなるネットワーク)

12月19日(月)に第3回教育支援コーディネーター連絡協議会(あすなるネットワーク)を開催しましたので、その内容について報告します。(講話・資料抜粋) (*詳細は資料参照)

講師に高知県スクールカウンセラーの小松宏暢さんをお迎えし『不登校を中心とする諸課題についての理解～児童生徒の心理的サポートを踏まえて～』と題して、講話と事例演習をしていただきました。

はじめに、文科省通知の不登校の定義、不登校児童生徒の推移、不登校の背景等について確認しました。

「学校にいけない・・・」子どものココロとして、1.自分に自信が持てない、2.人間関係が怖い、3.学校や家族に反発したい、4.将来への漠然とした不安、5.原因が分からずに混乱していると。そして、不登校に影響しうるかもしれない親御さんの特徴として、1.教育熱心である、2.高学歴、または学歴コンプレックスを持っている、3.子どもを親自身と同一視している、4.他人の目を気にしている、5.子どもとの距離感を掴めていないなどが挙げられます。過干渉と放任のバランスを考えることも必要です。不登校の子どもに出来る7つの対応として、①休んでも良いと伝える、②労いや頑張りを認める言葉を伝える、③子どもの話に耳を傾ける、④勉強や進級について学校に相談する、⑤保健室(別室)登校を考える、⑥サポート団体を利用する、⑦親御さん自身のリフレッシュを大切に。などここに紹介しきれないほどの話をさせていただきました。



終わりに、「本人が基本的な安心・安全が担保されてはじめて、自己肯定感・自尊心(コミュニケーション力の獲得)が育まれてくる。子どもの歩幅に合わせて対応していく(スモールステップを心がける)ことも重要である」と述べられました。

事例演習としては、「不登校生徒」の事例について、グループワークを行いました。各グループでは、与えられた事例内容を「打ち明けられた際の対応」「今後の対応」「情報の取り扱い方」「その他」の4項目について、まず打ち明けられた先生として考え、グループ内で話し合い、情報共有をしました。

= 感想 =

- ・今回の内容は、小中高とも共通して悩む課題であったと思います。教員間でも理解できる人、できない人がいるのが現状です。それをチームとして取り組むためのポイントなど、また教えていただければと思いました。特に「人に会うことを怖がる子ども」をどのように理解し、寄り添えばいいのか、よいアドバイスがあれば…。
- ・不登校の要因も多様であり、一人ひとりの援助や配慮が大切な事を学びました。人間関係が怖い、自分の思いが伝えられない、意見が言えない所は、自分自身も大切な所だなと感じました。幼児期でも大切な部分だと思うので、今後の保育にもつなげていきたいと思っています。
- ・不登校を抱える児童生徒はそれぞれ理由があり、その理由を分かる事から始める必要があると痛感しました。そのために当児童との信頼関係を築くことが重要だと思いました。信頼関係を築くには、心に寄り添う・共感が大切で、こっちがどういう対応をするかで、距離が縮まるきっかけになると感じました。今日の研修で学んだことや資料を元に校内研修で共有して、一人ひとりの児童に合った対応を全職員で出来るようにしたいです。



皆様おそろいにて、良き新年をお迎えください
2023年がお互いの飛躍の年で
ありますようにお祈りいたします

